

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくりinほくりく

2019 NEW YEAR



朝の萬代橋(信濃川左岸上流から)

絵 土田 和男

新潟の発展を願い架けられた萬代橋は現在3代目。昭和4(1929)年8月に完成し、今年90年を迎える。アーチの美しさと石づくりの重々しさが調和した風格ある姿は、新潟市のシンボルとして親しまれている。平成16(2004)年7月、「重要文化財」指定

◆ 新年のご挨拶

近藤 淳(北陸地域づくり協会 理事長)

2

◆ 年頭のご挨拶

吉岡 幹夫(北陸地方整備局長)

3

◆ 随想

藤岡 慎二(北陸大学地域連携センター長)
教育を核とした地域の活性化
～全国に拡大する高校魅力化プロジェクト～

4

◆ 特別企画Ⅰ

第7回全国「道の駅」シンポジウムin三条
開催報告

新潟県三条市経済部営業戦略室

6

◆ 特別企画Ⅱ

道の駅「西・奥会津ネットワーク」
シンポジウム 開催報告

10

◆ 特集「地域とともに」

八十里越の歴史に学び、しただの明日につなげる
特定非営利活動法人しただの里(新潟県三条市)

12

◆ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

発想を変え佐渡を醸す
学校蔵プロジェクト(新潟県佐渡市)

14

◆ 北陸再発見

戸隠の魅力を具現する「高原花豆」
(長野県長野市)

16

◆ 会員だより

18

◆ 伝言板

24

新年のご挨拶

(一社)北陸地域づくり協会 理事長

こんどう あつし
近藤 淳



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆さまにはおかれましては、健やかに新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

新年を迎えると「今年はどうなるのだろうか?」といった時事解説や経済予測を目にします。また、「どんな年にしたいか?」を考える機会にもなります。

最近では、ネットで簡単に情報を得ることができますので、干支を調べてみるのも面白いと思うようになりました。漢字の成り立ちの勉強にもなりますし、歴史からヒントをもらうこともできそうです。

イノシシ年は地震が多い年と言われています。

- ・1707年 宝永地震、富士山宝永噴火
- ・1923年 関東大震災
- ・1983年 日本海中部地震、三宅島噴火
- ・1995年 阪神大震災
- ・2007年 新潟県中越沖地震

災害は忘れたころにやってくるといいますが、近年は忘れる前にやってくる、しかも想定を超える被害も多くあります。

さらに詳しく、十干十二支(干支)では「己亥=つちのとい・キガイ」です。

ネット上では、悲観的なものから希望的なものまで様々な解釈があります。代表的なものを一つ紹介します。

己の字は三本の平行線を形取ったもので、「植物が充分生長し形が整然としている状態」という意味があります。また、亥は「草木の生命力が種の中に閉じ込められた状態」を表しているとされています。

言い換えれば、「己 → 完成した自己や成熟した組織が、それまでの主義、規律、秩序などを見直し、次の段階を目指す準備をする年」「亥 → 個人は知識を増やす、精神を育てる、組織は人材育成や設備投資、財務基盤を固める年」が今年になります。

一方で、古代中国の陰陽五行説では、己亥の年は、「土が水を濁す、また、土は水を吸い取り、溢れようとする水を堤防や土墨などでせき止めるという意」を表しているそうです。

今春はエルニーニョ現象が続く可能性が高いとの見通しもあり、北陸ならではの豪雪や融雪災にも備えが必要です。また1959年(己亥)の伊勢湾台風を契機に災害対策基本法が制定されました。60年後の2019年には国土強靱化への本格的な投資がスタートします。

北陸地域づくり協会は、これまで会員の技術力や経験を活かし防災エキスパート活動などで、災害からの復旧復興に貢献してまいりました。災害時の迅速な対応は、地域と現場を知る産官学・地域団体の連携が不可欠だと考えます。当協会としては、日頃からの防災教育や訓練などを通じてしなやかな連携を確保し、いざ災害の時には強い総合力を発揮する一員になればと思います。

北陸の活力ある地域づくりのためには、防災以外にも様々な分野での活動が求められています。引き続き会員の皆さまのご指導・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。2019年が皆さまにとって良い年になりますよう祈念し新年の挨拶とします。

年頭のご挨拶

国土交通省 北陸地方整備局長

よしおか みきお
吉岡 幹夫



平成 31 年の新しい年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人北陸地域づくり協会の会員の皆様には、平素より北陸地方における国土交通行政の推進に、ご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年の北陸地方整備局所管主要事業におきましては、地域経済の活性化や地域の安全・安心の確保に向けて、大きなプロジェクトが進展しております。「大河津分水路改修事業」においては、いよいよ本格的な河道掘削が開始されるため、盛大に起工式が執り行われ、河道掘削及び野積橋架替の推進、新第二床固の改築など本格工事の安全が祈念されました。また、日本海沿岸東北自動車道「朝日温海道路」も 1 号トンネルをはじめとする工事の着実な進捗が図られています。利賀ダム建設事業では工事用道路（兼 国道 471 号利賀バイパス）の部分供用が可能となり、開通式が挙行されたところです。金沢港の無量寺埠頭では、海外クルーズ船寄港の増加対応として、岸壁整備を鋭意進捗させたところです。

新たな年においても北陸地方の安全・安心の確保、社会資本の整備・保全を着実に進め、地域の社会経済の発展の一助となりますよう努めて参りますので、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、昨年は 1 月の豪雪にはじまり、西日本の豪雨災害や北海道胆振東部地震など、激甚な災害により多くの被害がもたらされた年でもありました。西日本の豪雨災害及び北海道胆振東部地震では、被災地の早期復旧・復興支援のた

め、全国から TEC-FORCE や災害対策機械が派遣され、北陸地方整備局からも TEC-FORCE 隊延べ 809 人・日を派遣しております。これらの災害を踏まえ、昨年 11 月に政府として「重要インフラの緊急点検に関する関係閣僚会議」を開催し、緊急に実施するべきものの達成目標、実施内容、事業費などを明らかにした方策が防災・減災・国土強靱化のための 3 カ年緊急対策としてとりまとめられました。これを踏まえ、北陸地方整備局としても自然災害に対する社会資本の強化に万全を期して行く所存であります。

建設業をとりまく情勢を見ますと、昨年は、建設業が適用外であった所定外労働時間の上限規制が設定されるなど、政府全体をあげての働き方改革の動きが大きく加速した年でありました。北陸地方整備局においても、ICT 技術の普及促進や国債工事活用による施工時期の平準化、適切な工期設定、週休 2 日のモデル工事等による労働環境改善などの取組を、今後さらに関係機関の皆様とともに確実に進めて参ります。

北陸地域づくり協会におかれましては、災害に対する安全・安心推進のための防災エキスパート活動や専門的知識・技術の普及・伝承のための北陸建設振興会議の活動など、北陸地方のさらなる発展に貢献いただき、心から感謝申し上げます。

結びに、会員各位におかれましては、引き続き北陸地方整備局に対する一層のご指導、ご助言をお願いするとともに、皆様のご健勝と益々のご活躍を心からご祈念申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。

教育を核とした地域の活性化 ～全国に拡大する高校魅力化プロジェクト～

ふじおか しんじ
藤岡 慎二

北陸大学地域連携センター長 兼 経済経営学部教授

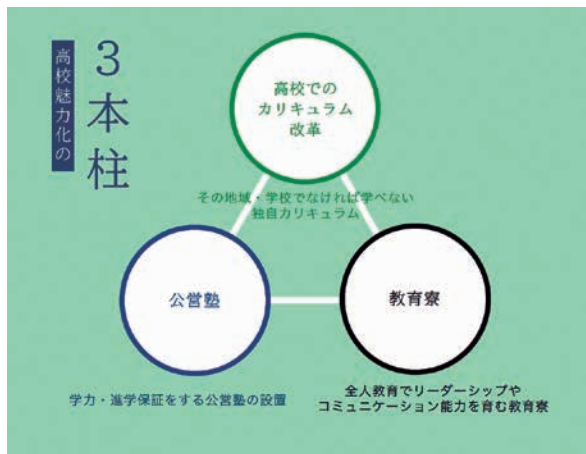
1975年生まれ。慶應義塾大学政策・メディア研究科で修士課程を修了後、株式会社 Prima Pinguino を起業。教材開発から教育コンサルティングまで実施。島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクトを皮切りに日本全国で高校魅力化プロジェクトを展開する。2017年から北陸大学に着任し、金沢を拠点として活動している。

総務省地域力創造アドバイザー、慶應義塾大学 SFC 研究所上席研究員、株式会社 Prima Pinguino 代表取締役、OECD 日本イノベーション教育ネットワーク連携研究員。



「高校魅力化プロジェクト」が全国に拡大しつつある。

少子高齢化により統廃合・クラス減による教員減などで危機感を持つ高校が中心だ。独自の授業を総合学習や学校指定科目で設定し、他の地域・高校では学べない内容を前面に打ち出し差別化を図る。離島中山間地域には塾が無く受験に不利と言われる。そこで、公営の塾を設置し、優秀な講師を揃え、キャリア教育と学力向上により、主体的な目的意識も当事者意識、学力も育成する。最後に生徒を地元のみならず、日本全国から募集する。そのために教育寮で食事と寝床だけでなく、気付きと出会いを与え、教育付加価値向上を図る。高校のカリキュラム改革・公営塾・教育寮の三本柱による教育改革、教育を通じた地域の活性化に関する試みが、政府の地方創生政策と軌を一にする形で、全国の市区町村などの自治体を巻き込み、胎動を始めている。



高校魅力化プロジェクトに至る経緯と地方の事情

現在、全国にある3,600あまりの公立高校のうち、1年間に統廃合されるのは60校前後。10年後には6校に1校は無くなる計算だ。特に離島中山間地域で、通学圏内にある唯一の高校の場合、事態は深刻だ。

地域における高校の有無は、実は人口の増減に影響する。

国交省のデータによれば高校がある地域は、ない地域に比べてUIターンの数は20倍であり、高校があれば人口減少は10%ほど減するという。また、人が中山間地域から出る理由の一つに「高校まで通学が困難だった」があるという。

更に、三菱総研が「移住を望む20～30代の子育て世代は教育環境の充実した地域への移住を希望する傾向がある」と分析しているレポートもある。

自治体の定住・移住促進窓口の担当者は「移住の問い合わせの際に、子どもを持つ親の場合は、必ず教育の質、とりわけ高校での教育の質について聞かれることが多い。時代は変わっている」と指摘する。地域における教育の充実は移住や定住促進、つまり地方創生の一貫なのである。

島根県立隠岐島前高校から全国に広がる高校魅力化プロジェクト

島根県沿岸から北へ60km、日本海に浮かぶ隠岐諸島の隠岐島前地域にある唯一の高校が、島前高校である。高度成長時代、島の若者の

多くは進学・就職のために都市部へ流出し、20-30代は激減し、生まれる子どもの数も少ない。島前高校がある海士町は、高齢化率は約40%、超少子高齢地域だ。

筆者も参画していた隠岐島前にある島根県立隠岐島前高等学校(島前高校)の魅力化プロジェクトに注目が集まっている。島前高校、島前三町村、地域住民が協働し、魅力ある学校づくりからの持続可能な地域づくりを目指す取り組みだ。地域資源を活かした教育カリキュラムの導入や、高校と地域の連携型公営塾「隠岐國学習センター」の開設、全国から多彩な意欲・能力ある生徒を募集する「島留学」など独自の施策が行われている。この高校への入学を希望する生徒数も増え続け、生徒数が2倍に。今は日本全国・世界からの島留学生在が生徒数の半数に至る。平成23年度には過疎地の学校としては異例の学級増を実現、奇跡の復活ばかりではなく、地域の活性化、子育て世代の移住、人口増加などに貢献している。少子化で生徒数の減少に悩む学校や将来の地域リーダーの育成に取り組みたい自治体のモデルとして、全国からの視察が絶えない。(詳細は、岩波書店『未来を変えた島の学校～隠岐島前発ふるさと再興への挑戦～』を参照。)



現在、全国募集をしている公立高校は200校以上。筆者が展開している高校魅力化プロジェクトは、北海道羽幌町立天売高校・長野県白馬高校・広島県立大崎海星高校・沖縄県立久米島高校などで、高校のカリキュラム改革・公営塾・教育寮の三本柱による教育改革により、生徒数は増加しプロジェクトスタート時の2倍に迫る高校もある。進学実績も躍進的に伸びた高校も

あり、5%の大学進学が60%まで伸び、国公立大学や早慶上智などの難関大学に進学するような高校もある。現在筆者は、北は北海道利尻島から南は石垣島まで20箇所以上で展開し、北陸地域では新潟県立阿賀黎明高校や石川県立能登高校で実施しており、既に実績が出つつある。

地域と連携した学びがブーメラン人材を育む

「進学率が伸びても、進学や就職で若者が出て行き、地元には帰ってこない」という心配は要らないようだ。高校内での「地域学」や公営塾での「夢ゼミ」など地域と連携した授業が前述の心配を払拭する。例えば、夢ゼミは、生徒たちが自身の「やりたいこと」と「地域のためにできること」の両方を満たす“夢”を議論しながら1年間探究する。この探究の結果、学習意欲や目的意識が向上し、学力の向上のみならず、「仕事がないから帰れないではなく、仕事を創りに帰りたい」という高校生が増えた。現に慶應義塾大学に進学した若者は卒業後に島に帰り、高校時代に培った夢を実現すべく奮闘を始めた。このような一度は進学や就職で地域を出て、知識やスキルを身につけ、人脈を培ってから地域に帰り活躍する人材を「ブーメラン人材」と呼ぶ。このブーメラン人材が全国で生まれつつある。



「夢ゼミ」の風景、左上が筆者

変革は辺境から生まれるという。魅力化プロジェクトを実施している高校は離島中山間地域という辺境にあり。辺境だからこそ、危機感を持ち、変革の遺伝子を組み込まれた人材が生じるのではないかと。地域活性化・地方創生の根幹は人財にあり。よって教育が重要なのだ。

第7回全国「道の駅」シンポジウムin三条 開催報告

三条市経済部営業戦略室 観光係長 樋口達雄

【開催主旨】

「道の駅」は平成5年の制度開始以来25年が経ち、現在では1,145駅（平成30年4月25日現在）が登録されています。

近年の「道の駅」は休憩・情報発信・地域連携といった機能に加え、災害時の被災者支援、広域応援拠点としての防災機能や観光情報の提供など地域観光のゲートウェイ機能を有し、今では地域活性化の拠点として欠かすことのできない役割を果たしています。



全国の「道の駅」設置者で構成されている全国「道の駅」連絡会が平成24年に設立されたことを機に始まった『全国「道の駅」連絡会総会・シンポジウム』は、第1回の東北ブロックを皮切りに各ブロックで開催され、去る9月27日(木)に、北陸ブロックで『第7回全国「道の駅」連絡会総会・シンポジウム in 三条』（主催：全国「道の駅」連絡会、三条市）を新潟県三条市の道の駅「燕三条地場産センター」で開催しました。シンポジウムには、「道の駅」設置者や運営者、道路管理者など、全国から「道の駅」に携わる関係者約1,300名が参加しました。



【全国「道の駅」シンポジウム】

シンポジウム開会に先立ち、開催ブロックを代表して北陸「道の駅」連絡会会長である地元三条市長のくにさだいさと國定勇人は、関係者の燕三条地域へ



北陸「道の駅」連絡会 会長
三条市長 國定 勇人

の来訪を歓迎するとともに、「今、北陸「道の駅」連絡会では、情報発信機能の強化として、道路交通、気象、地域の観光等のさまざまな情報を提供する無料のWi-Fiスポットでもある「北陸道の駅SPOT」や、インスタグラム等のSNSを活用した情報発信にも力を入れているところです」と、北陸3県の「道の駅」で共通して取り組んでいる事業を紹介した上で、車で砂浜を走れる「千里浜なぎさドライブウェイ」が近い、石川県羽咋市の道の駅「のと千里浜」など、個々の「道の駅」の特色も紹介し、「全国各地の事例を今日のシンポジウムの中で皆様方と共有させて頂き、それぞれの「道の駅」がそれを持ち帰り、一つ一つの「道の駅」が新たな発展を遂げ、その相対としての「道の駅」ネットワークが、更なるブランド力の強化につながることに期待を寄せている」と挨拶しました。

来賓祝辞では、はなずみひでよ花角英世新潟県知事からのビデオメッセージが流されました。花角知事は、「制度の発足から25年が経過した今、「道の駅」は、道路利用者のための休憩施設に留まらず、地域の特産品や観光資源を活かす施設、防災拠点施設、住民サービスを提供する施設など、地方創生の拠点として期待される役割は多岐に



新潟県知事 花角 英世 氏
(ビデオメッセージ)

わたっています」と話し、「2日間にわたり開催される総会、シンポジウムが、全国の「道の駅」の結束、連携、情報共有するための良い機会となり、「道の駅」全体の質的向上に大きく貢献されることを期待しています」とメッセージを頂きました。

●座談会

シンポジウムは2部構成で行われ、第1部では、『「道の駅」と地域産業・新しい観光のあり



方について』と題し、座長を国定三条市長が務め、「燕三条 工場の祭典」実行委員長の山田立氏、株式会社能作取締役で産業観光部部長の能作千春氏により、産業観光の可能性、「道の駅」の可能性について、各々の体験や課題・戦略について話し合いがされました。



三条市長 国定 勇人

国定三条市長は、ものづくりのまち燕三条のスタンスとして「百円の包丁を買ってくれる一万人の人を追い求めるのではなく、一万人の包丁を買ってくれる百人を追い求める。そうした取り組みが大事だ」と指摘し、そのためにも、モノの価値をしっかりと伝えていくことがポイントになると話題を提供しました。



「燕三条 工場の祭典」
実行委員長 山田 立氏

これを受けて、「燕三条 工場の祭典」実行委員長の山田立氏は、「ものづくりのこだわり、その裏にあるストーリーはなかなか伝わりにくい。しかし、

単に並べるだけでは価格だけで選ばれてしまう。見せ方、陳列の仕方でも価値を伝えることができる。更に私たちは、製造の現場を見てもらうのが手っ取り早いと、工場を開放するイベント「燕三条 工場の祭典」を始めた。ものづくりの現場を、五感で感じ取ってもらうことで、価格に納得してもらえようになった」と、価値をしっかりと伝えることの重要性について述べました。



(株)能作 取締役
産業観光部部長
能作 千春氏

創業から102年の富山県高岡市の鋳物メーカーの株式会社能作取締役産業観光部部長の能作千春氏は、産業観光に力を入れていること、新社屋で創業時からの2,500を超える

木型を展示していることなどに触れ、年間十万人を超える来社・見学があることを紹介し、ものづくりの現場に近づいてもらうことの重要性などを指摘しました。

能作氏は、同社で行っている工場体験や鋳物製作体験、カフェやショップなどを紹介するとともに、その産業観光と「道の駅」の関わりについて、「ゲートウェイ、きっかけになればと考えた時に、「道の駅」の果たす役割はもっともっと広がってくるのではないかとし、「今、どちらかと言えば、モノを買うというモノ消費の場に留まっているが、ここからなんとかコト消費につなげていき、コト消費からモノ消費という好循環ができないかと思っている」と、産業観光の可能性に期待を込めました。

●パネルディスカッション

第2部は、『観光と地域産業と連携した「道の駅」』と題し、コーディネーターに一般財団法人日本みち研究所理事長で筑波大学名誉教授の石田東生氏、パネリストとして「道の駅」有識者懇談会委員で株式会社JTBパブリッシングエグゼクティブ・アドバイザーの楓千里氏、教科書「道の駅」編集制作委員で株式会社テレビ新潟放送網監査役の堀井宏悦氏が各々の専門的立場から、田中幹夫富山県南砺市長、山辺芳宣

石川県羽咋市長が「道の駅」設置者の立場から議論が行われました。



パネルディスカッションでは、「道の駅」の課題や展望、富山県南砺市と石川県羽咋市の「道の駅」の現状について紹介され、観光やマスコミの立場からそれぞれ「道の駅」へのアドバイスを、石田氏からは「道の駅」のポテンシャルについてお話しいただき、地域活性化の拠点として「道の駅」が新たな活動や質的向上への取り組みを一層深化させる契機となりました。



(一財)日本みち研究所理事長
筑波大学名誉教授
石田 東生 氏



「道の駅」有識者懇談会委員
(株)JTBパブリッシング
エグゼクティブ・アドバイザー
楓 千里 氏



教科書「道の駅」編集制作委員
(株)テレビ新潟放送網監査役
堀井 宏悦 氏



富山県 南砺市長
田中 幹夫 氏



石川県 羽咋市長
山辺 芳宣 氏

【三条宣言】

最後には、本大会のシンポジウム内容を踏まえた「三条宣言」が採択されました。「道の駅」と地域産業が連携したこれからの観光や産業振興のあり方について議論を深めたことや、多発する自然災害に対して「道の駅」が災害支援の拠点として機能し、地域の「安全・安心」に寄与することの重要性のほか、全国「道の駅」連絡会事務局の法人化に向けた体制強化、地域活性化・地方創生の拠点として「道の駅」が機能や役割を発展させ、より一層進化させていくことなどを盛り込んだ宣言を行いました。



全国「道の駅」連絡会総会・シンポジウムin三条 三条宣言

全国「道の駅」連絡会は、本日ここ新潟県三条市において、全国「道の駅」連絡会総会・シンポジウムin三条を開催しました。

平成5年に道路の休憩、情報発信、地域連携の3つの機能を持つ施設として創設された「道の駅」は、現在、全国で1,145駅が登録されており、地方創生の拠点として、その役割は益々多様化しています。

平成16年に新潟県中越地方を襲った新潟県中越地震を契機に「道の駅」は、防災拠点としての役割が目ざされ、近年は、高齢者や子育て世代への福祉機能や地域観光機能を担うなど、地域活性化及び観光立国の推進役として、大きく発展してきました。

シンポジウムでは、制度創設25周年を迎えた「道の駅」と地域産業が連携したこれからの観光や産業振興のあり方について、議論を深めました。

地域の特色ある産業と地域観光、「道の駅」が連携した取り組みとして、「道の駅」が地域のゲートウェイとなって、製品の製造見学や体験などのイベントのほか、6次産業化・地産地消を取り組む中で、来訪者も大幅に増えております。

また近年、「道の駅」においても外国人観光客が大幅に増加しており、免税店やJNTO認定外国人観光案内所の拡大等、より一層のインバウンド対応の必要性が示されました。

更には、多発する地震や豪雨、台風などの様々な自然災害に対して、「道の駅」が避難所や災害支援の拠点として機能するなど、社会インフラとして重要な役割を果たしており、「道の駅」が地域や「道の駅」相互で連携し、地域の「安全・安心」に寄与することの重要性を改めて認識しました。

私たち全国「道の駅」連絡会は、来年度の法人化に向けて体制強化を図り、「道の駅」が地域活性化・地方創生の拠点として、防災、福祉、観光、産業等の機能や役割をさらに発展させると共に、次の時代に向けて、全国の「道の駅」や関係する方々と互いに手をつなぎ、「道の駅」をより一層進化させていくことを、ここに宣言します。

平成30年9月27日
全国「道の駅」連絡会

【道の駅まつり】

同時開催された「道の駅まつり in 三条」では、新潟、富山、石川の北陸3県から18の「道の駅」が出店。グルメ・特産品が一堂に集結し、販売などを行いました。加えて、三条マルシェ風の出店もあり、来場者は約3,500名で、お昼過ぎには売り切れが出るなど大変な賑わいとなりました。



【現地視察】

翌28日には、Aコース『地域のモノづくりを支援する「道の駅」コース』、Bコース『災害支援や記憶伝承の役割を担う「道の駅」コース』、Cコース『地域の食の魅力を発信する「道の駅」コース』、Dコース『インフラツーリズム』と4コースに分かれて、新潟県下越・中越地域の「道の駅」や観光地などを巡る現地視察が行われました。

天候にも恵まれ、約160名の方々が参加され、楽しく無事に現地視察を行っていただきました。



【Aコース】
三条鍛冶道場での鍛冶体験



【Bコース】
道の駅「パティオにいがた」で昼食



【Cコース】
道の駅「新潟ふるさと村」で展示物等の説明



【Dコース】
八十里越道路(R289)の概要説明

【おわりに】

全国の「道の駅」設置者や運営者、道路管理者などが集い、「道の駅」を取り巻く環境やニーズ、ポテンシャルについての認識を共有でき、大変有意義なシンポジウムとなりました。

来年度は、四国ブロックの「香川県綾歌郡宇多津町」での開催が決定しました。



道の駅「尾瀬街道みしま宿」から望む紅葉は圧巻



(図は福島民報社提供)

豊かな自然に恵まれ、伝統・文化が息づく「西・奥会津」。11月6日、福島県三島町で、地域住民、有識者、道の駅、自治体等が参加し、「道の駅」を拠点とした地域づくり、連携について考えるシンポジウムが開催されました。全国「道の駅」連絡会「道の駅」アドバイザー 小山源昭氏をコーディネーターに、道の駅が立地する6町村長の意見交換が行われ、(株)JTBパブリッシングエグゼクティブ・アドバイザー 楓千里氏が総括されました。最後にシンポジウムの内容を受け、道の駅「西・奥会津ネットワーク宣言」が発表されました。

道の駅を拠点に、豊かな自然の中で育まれてきた歴史・文化をつなぎ、ネットワークで課題解決

首長発言

柳津町長 | 井関 庄一 氏

足湯、斉藤清美術館は、道の駅利用者の滞在時間を伸ばしている。道の駅それぞれが役割を持って連携し、関係を強化し、関係人口を増やしていく。連携して情報発信できる体制をつくり活性化につなげたい。

西会津副町長 | 工藤 倫也 氏

道の駅来訪者の7割が新潟県からで福島県の玄関口。「健康の町」宣言をしミネラル野菜を栽培・販売、その縁で沖縄県宮古島市と交流があり、「沖縄宮古島コーナー」を設置し人気がある。災害をシミュレーションし防災訓練を計画している。



三島町長 | 矢澤 源成 氏

雪国の生活文化が見直される時代になってきた。多様性を大事にしつつ、都会とは違う幸せの尺度で地域を考え、伝統行事などでこの地域のネットワーク、統一性を図ってはどうか。

金山町長 | 押部 源二郎 氏

只見川沿いに5つの発電所がある。高齢化率は福島県内一だが、只見線の写真撮影などで、道の駅に滞在する人が増えてきた。ソフト面の対応を充実し、満足感を高め、7つの温泉の滞在時間を増やしていきたい。

湯川村長 | 三澤 豊隆 氏

湯川村と会津坂下町で共同整備した道の駅。阿賀川に面した川の駅でもある。河川防災ステーションもある。交通の要衝にある道の駅を核とし、歴史、文化、産物を活かし地域づくりを進める。

昭和村長 | 舟木 幸一 氏

平成6年度に織姫制度をスタート。応募者は村外出身者がほとんど。研修後も約1/3が村内で暮らし若者定住につながっている。「おじいちゃん、おばあちゃんは暮らしの達人」など、住民が気づかなかった村の素晴らしさを情報発

信じていきたい。道の駅では「からむし織体験」ができる。舟木容子駅長は初代織姫。

楓氏は、「首長さんが、道の駅を西・奥会津地域のキラコンテンツとして大切にし、道の駅を拠点とした地域づくりを熱心に語られていることに感動した。道の駅制度創設から25年。今や道の駅は、旅行誌で『わざわざ行きたい道の駅』として特集が組まれるまでの全国ブランドとなり、利用者の期待値がどんどん上がっている。

“この地域だからこそ”のコトをどう見せていくかが鍵となるが、それは“人”。地域のひととのふれあい、駅長さんに会いに行く、道の駅に食育ソムリエなどのエキスパートがいるなどあげられる。只見川沿いに発電所が多数あるこの地域なら、発電所を巡るインフラツーリズムを企画し、人を引きつける解説をするガイドも考えられる」とし、「今後、インバウンド受け入れ、子育て支援など、いろいろ課題が出てくると思うが、一つの道の駅で考えるのではなく、ネットワークの中で解決し、利用者の期待に応え、ブランド力向上に努めてほしい」と結ばれました。

道の駅「西・奥会津ネットワーク宣言」

豊かな自然と長い歴史に育まれた「西・奥会津」に立地する私たち6つの道の駅は、観光を通じて交流人口を増やし、特産品の販売と6次産業化を通じて地域に豊かさと呼び込むため、スクラムを組んでエリア全体の魅力を発信し、地方創生の実現に努めます。

また、災害時等の自助・公助・共助の拠点として自らを位置づけ、地域全体の防災力や福祉力の向上にも力を合わせて取り組んでいきます。そして、上記の目標を達成するために、「西会津・奥会津」の強い絆を生かしながら、次の連携の実現を目指します。

連携1 「西会津・奥会津」の魅力が大消費地の首都圏に届けるため、東京にある福島県のアンテナショップ「日本橋ふくしま館」等で、6駅共同の観光・物産展などに積極的に取り組むことを目指します。

連携2 「西会津・奥会津」の豊かな観光資源や特産品をパッケージにして商品化し、国内のみならず、インバウンド（訪日外国人）観光客の更なる取り込みに向けて、その情報を積極的に発信していきます。

連携3 近年増加する災害に向けて、各駅が防災力向上を目指すとともに、災害協定を積極的に締結していくことにより相互支援の体制を強化し、会津地方全体の防災力を高めることを目指します。



首長・駅長の記念撮影



ステージに並べられた各駅自慢の特産品

6町村プロフィール（人口は平成30年11月1日現在）

	柳津町	西会津町	三島町
道の駅	会津柳津	にしあいづ	尾瀬街道みしま宿
制定年	H14.8	H16.8	H18.8
人口	3,421人	6,379人	1,649人
特産品	赤ペコ、あわまんじゅう、博士そば等	ミネラル野菜、車麩等	奥会津編み組細工、会津総桐たんす等
	金山町	湯川村	昭和村
道の駅	奥会津かねやま	あいづ湯川・会津坂下	からむし織の里しょうわ
制定年	H25.3	H26.4	H26.4
人口	2,083人	3,097人	1,277人
特産品	奥会津金山赤カボチャ、アサギ大根等	会津湯川米、アスパラガス等	からむし織、カスミソウ等



交流会は手づくりの郷土料理、地酒が用意され、アットホームな雰囲気、会話がはずみました。翌日の地方紙一面にシンポジウムの記事が掲載され、道の駅への期待の高さを感じられました。

全国「道の駅」連絡会によると、隣接する道の駅が観光や地域振興、防災など多岐にわたる分野で連携する例は全国的にも珍しいそうです。今後「西・奥会津ネットワーク」をモデルとし、全国に発展させたいとのことでした。また、首長と駅長の距離が近く、とても良い関係が築かれているとお話を伺いました。交流会も、親戚同士のような「絆」が感じられ、災害時の相互支援もスムーズに進むものと期待できました。（文責 編集事務局）

特集「地域とともに」

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、平成7年から公益事業として「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業制度を創設し、地域活性化に成果が期待できる事業を募集・採択し支援してきました。

今回は、第21～23回(平成28～30年度)事業で支援している「特定非営利活動法人しただの里」の研究活動を紹介します。

八十里越の歴史に学び、しただの明日につなげる

特定非営利活動法人しただの里(新潟県三条市)

吉ヶ平と八十里越

「八十里越」は、新潟県三条市下田地域から福島県只見町に至る県境部分、延長約20.8kmを指す。旧道だと約32km、8里ほどだが、あまりの険しさゆえ1里が10里に感じられたことが名前の由来だと言われている。司馬遼太郎の小説『峠』の舞台となり、戊辰戦争で敗走する長岡藩河井継之助が詠んだ「八十里こしぬけ武士の越す峠」で知られる歴史の道でもある。



多くの人が行き交った八十里越

江戸時代、県境の玄関口・見送り口となる吉ヶ平よしがひらは多くの人や物資が行き来し、宿屋が建ち並び、只見の人たちに「越後の京」と呼ばれるほど賑わっていた。明治23年、県道に昇格するが、大正3年に岩越線(現在の磐越西線)が全通すると八十里越を利用する人が減少し、村を離れる人が多くなっていった。豪雪、水害などが続き、昭和45年、源氏の落人伝説がある集落は、集団離村しその歴史を閉じた。



八十里トレッキングツアーの出発は「吉ヶ平自然体感の郷」

八十里越を知りたい、歩きたい

森町小学校吉ヶ平分校は、離村後、「吉ヶ平を人々の記憶に残したい」という思いを持つ人達により「吉ヶ平山荘」と名を変え保存されていた。平成10年、吉ヶ平・雨生ヶ池まおいが池に伝わる大蛇伝説にちなんだ行列行進がメインとなる「しただふるさと祭り・雨生の大蛇祭まおいが祭」が創設された。森町小学校卒業生で、祭りの運営に関わっていた大竹晴義さん(59)は、「吉ヶ平の歴史を知っている人が生きていううちに、記録をまとめなくては。吉ヶ平の歴史を調べ伝える中で、これからの下田も見えてくる」と、古文書を読み、疑問がわくとその答えを求め、県内はもとより、只見町を始め各地のキーマンを訪ねるようになった。



八十里越(新潟県側)「天保古道」、「明治新道」

平成25年、吉ヶ平山荘は「吉ヶ平自然体感の郷」に生まれ変わり、集落の歴史ロマンを伝え、守門岳などへの登山、釣りのベースキャンプなどの自然体験基地として、観光振興を進めることになった。これにあわせ、「新道、古道をトレッキングコースとして整備し、一般観光客が安全に楽しめるようにしたい。新しいルー

トもつくりたい」と大竹さんは、特定非営利活動法人しただの里を設立した。

早速企画した八十里トレッキングツアーに手応えを感じ、ツアーに参加した他地域の人に、定期的にこの地域に来てもらい、トレッキングをしながら道の整備にも参加してもらおうと「八十里倶楽部」を結成し、研究助成事業に応募し事業を加速することにした。



草を刈り道を整備、標識を設置。河井継之助が通った「天保古道」のどこかに長岡藩の埋蔵金3千両（今の価値で6億円）が眠っているとも言われている。

平成28年度は、八十里越の「明治新道」、「天保古道」を14回にわたり調査・整備した。椿尾根から天保古道を経由し番屋山へと向かうルートを整備し、番屋山を周回して吉ヶ平に戻る新しいトレッキングコースを完成させた。

平成29年度は、吉ヶ平の産業遺産の一つである「北越鉾山跡地」にスポットを当て、歴史産業遺産を巡る新たなトレッキングコースを整備するための調査・研究を行った。

28年・29年度調査後に研究者を交え行ったフォーラムには、いずれも200名を超える参加者があり、改めて八十里越の魅力と人気の高さを認識した。

■ 次代につなぐ

平成30年度は、「明治維新」、「戊辰戦争終結」から150年目にあたるが、下田の児童が郷土の歴史を学ぶ機会がなかなかない。そこで森町小学校6年生を対象に、歴史研究家・学校と連携し、『リアル戊辰戦争体験3DAYS』を開催し、歴史の転換点で自分の住む地域がどのように関わったかを学び、これからの時代を生きるために考えたことを発表してもらうことにした。

10月、事前学習の後、長岡藩の陣が置かれた駒込観音堂、赤坂古戦場跡、吉ヶ平自然体感の郷など戊辰戦争の跡地をまわった。

12月、「戊辰戦争終結150周年記念フォーラム—下田を駆け抜けた最後のサムライ」で、河井継之助記念館長、稲川明雄さんの講演後、学んだ成果を全員が参加し劇で演じた。



(左) 赤坂峠で赤坂古戦場保存会藤家彰人会長から説明を聞く。(右) 石動神社に残る戊辰戦争で使われた砲弾を手にし、郷土の歴史を身近に感じる。



「下田を駆け抜けた最後のサムライ」を熱演



稲川先生に「戊辰戦争」について質問

授業開始時は、「江戸時代？戊辰戦争？想像できない！」と言っていた子供たちも「私たちのご先祖様も赤坂峠で戦っていたのかな？」と江戸から明治に至る下田の歴史を地域、家族の歴史としてイメージできるようになった。フォーラムの最後には、「下田を誇りに思う。知ってもらいたい」、「下田で農業をやりたい」と郷土に愛情を持つようになった。「現在、国道289号の工事が急ピッチで進められている。何年後かには、只見町まで30分という距離になる。子供たちが大人になった時、かつてのような交流が復活し歴史に刻んでいけるよう今から準備をしたい」と大竹さんは力を込めた。

【取材協力・写真提供】
特定非営利活動法人しただの里

三条市月岡1丁目38番9-1号
連絡先は事務局の三条市市民活動支援センター
TEL:0256-34-8960

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

発想を変え佐渡を醸す 学校蔵プロジェクト（新潟県佐渡市）



日本で一番夕日がきれいな小学校”と謳われながらも2010年に廃校となった旧・西三川小学校。2014年、木造校舎は、学校蔵としてよみがえった。

佐渡市真野新町にある1892年創業の「真野鶴」。「米」「水」「人」に、それらを育む「佐渡」を加えた「四宝和醸」を掲げ、佐渡の自然と文化を活かした酒造りを行い、新潟初の酒蔵見学を始めた蔵としても知られる。

5代目蔵元、尾畑酒造株式会社 専務取締役の尾畑留美子さん（53）は、2014年から、廃校となった旧・三川小学校を活用し「学校蔵プロジェクト」に取り組んでいる。中でも「学校蔵の特別授業」は、毎年、100人超の生徒が全国から集まる。何が人々を佐渡島へ向かわせるのか、県内外の廃校利用、地域活性化を考える人たちの視察、取材は後を絶たない。「一目惚れした廃校を残すために、蔵元としてできることをやっているだけ。地域貢献につながっているなら嬉しいが、それはあくまでも結果」と話す尾畑さんから、プロジェクト、佐渡への想いなどを伺った。

「ここにしかないもの」を探そう

尾畑さんは東京の大学卒業後、映画会社の宣伝プロデューサーとして活躍。1995年、家業を継ぐ決心をし、現在、尾畑酒造の代表取締役社長を務める平島健さんと結婚し佐渡に戻る。しかし東京とは全く時間の流れが違い、思い描いていたように仕事は進まず、悶々とする日が続いていた。

2002年、まず自分の行動を変え、「うちの酒蔵の酒を米国人に飲んでもらいたい」という夢を実現するため海外輸出に乗り出した。

すると「東京をゴールにしない」と発想が変

化し、さらに「酒の魅力は生産地の個性」ということに気づき、佐渡島の「ここにしかないもの」探しが始まる。そして、2010年夏、健さんから、真野湾の丘に夕日を浴び日本海に望む旧・三川小学校をみつめながら、「学校蔵プロジェクト」構想を告白され、「出会ってしまった。これは、やらねばならぬ」と覚悟を決める。



毎年、海外で酒セミナーを行い新潟清酒、佐渡のこと、真野鶴を紹介する尾畑さん。写真はテイスティング後の記念撮影。「真野鶴・万穂」は、日本はもとよりアメリカのワインジャーナリストからも大絶賛を受けている。

未来を変える「特別授業」

「学校蔵プロジェクト」*の柱は4つ。佐渡産酒米100%の「酒造り」。一週間の仕込み体験ができる「学び」。自然再生エネルギーを酒造りに導入し賄う「環境」。そして「学校蔵の特別授業」を行う「交流」。

「特別授業」は、尾畑さんが中心となり、企画・マネジメントしている。「佐渡から考える島国ニッポンの未来」を大テーマに、『里山資本主義』の著書で知られる藻谷浩介さん、希望学の研究者、玄田有史さんなど著名な講師の講義が続き、最後に、「生徒総会」という佐渡高校の生徒の研究発表をもとに全員が参加するワークショップを行う。



多様な人が一緒に学ぶことによって化学反応が起きる特別授業

授業は無料、年齢制限なし、子連れOK、学校までの送迎なし。ただし、参加目的などを事前にレポートで提出してもらおう。何で佐渡まで行くのかを「思い返す」作業は、各人のふるさとへの想いに重なり、授業はその答え探しにつながっているようだ。尾畑さんは、レポートを何度も読み込み、ここは、この人に発言してもらおう、あの人は今しゃべりたいと思っているのでは？と考え進行する。

「16歳から70代までの人が集まり議論することで化学反応がおきる。子供たちの目がキラキラと輝き、大人も触発される。アクションが変わることは、未来を変えることにつながる。将来、佐渡の課題解決の原動力になるかもしれない」とこの事業をはじめて良かった、続けていきたいと思う。

※詳細は『学校蔵の特別授業』
(尾畑 留美子 著／発行・日経BP社・2015年)

■ 心の声を聞く

地域の中で自分が何をしたらいいのか迷っているなら、何も考えずまちを歩いてみるとか、祭りに参加してみるとか、まず動いてみるといい。よく「目標設定」が大事だと言われるが、そういった言葉に惑わされず、自分の感性にあったものをつないでいくと、ぼんやりしていたものが何となく見えてくる。心の声を聞き動けば、自分が探しているものに出会えるのではないか。

お酒の味も、蔵元のパーソナリティが反映されていることに最近気づいた。「学校蔵プロジェクト」をとおして、私たちが何を考えているかを伝え、うちの蔵の酒を感じてもらいたい。

■ 人は集まる

人口減少や高齢化を悲観的に考えていない。歴史的に見ればベストな人口は考えようだと思う。人は「何かおもしろいことをやっているな」と感じると集まってくる。本気でやっている人を見ると応援したくなるものだ。前向きなエネルギーを持っている人の周りには、同じような人が集まって来る。お互いに刺激し合い、何か創り出そうとする。佐渡には今、そういう、“佐渡でしかできないこと”をやろうとする人が増えている。

「佐渡はリーダーがいない、まとまっていない」と言われることが多いが、「まとまっている」というのは、短期的に見ると強そうに見えるが、長期的に見れば変化に弱いとも言えないか。

多様性を持ち、いろいろな人とゆるくつながっていることが大事。何かのアイデアに出会った時に異なるものを掛け合わせることで、新しい価値が生まれる。自分が出来ることを磨いておくことが、結果、誰かの役に立つことにつながる。

佐渡に住んでいる人が、「いいところだ」と自慢し楽しく暮らしていると、外から来る人は「住んでいる人が言うのだからきっと良い所なのだろう」と輝いて見える。

「佐渡の里山に飛ぶ朱鷺を見たい、酒蔵を廻りたいなど『佐渡通い』をする人を増やしたい」と語る尾畑さん。「小さな一歩を踏み出したからこそ、見える景色がある」と結ばれた著書は、映画を観るような感動があった。

今後、佐渡、「学校蔵」でどんな物語が展開されるか楽しみだ。



春の学校蔵

【取材協力・写真提供】尾畑酒造株式会社

新潟県佐渡市真野新町 449
TEL:0259-55-3171 FAX:0259-55-4215
<https://www.obata-shuzo.com/home/>

戸隠の魅力を具現する「高原花豆」(長野県長野市)

標高 800 m 以上の高地でしか栽培できない「高原花豆」。
大粒でインパクトがあり、市場では希少性の高まりにより人気がある。
戸隠の自然の恵みを受け栽培される豆は、繊維、ポリフェノールが豊富に含まれている。



戸隠高原で採れた花豆とエディブルフラワーを使った「花豆ベジタコライス」

藤色の地色に黒い模様が入ったアートのおしゃれな「高原花豆」。6月頃種を蒔き、夏、鮮やかな赤い花が咲き、9月～10月頃収穫される。

原産地はラテンアメリカの高原地帯

長野市と信濃町にまたがる戸隠山の南東方に広がる戸隠高原は、標高 1,000 ～ 1,200 m にある。中央構造線、糸魚川静岡構造線、柏崎千葉構造線の 3 つの活断層に挟まれたフォッサマグナ上に位置する丘陵地帯では、伝承されてきた農法をもとに、さまざまな農作物が栽培されている。「循環の理」にかなう昔ながらの農法に惹かれ、水谷 翔さん(31 歳)は、2016 年、長野市地域おこし協力隊の一人として戸隠に移住してきた。

さっそく、50 種類以上の野菜を半年かけてテスト栽培し、その中で、原産国がラテンアメリカで、戸隠と同じような河岸断層でできた丘陵地で栽培されてきた高原花豆と出会う。

どこにでもある作物より、標高 800 m 以上の高地でしか栽培できない「高原花豆」はおもしろいと、栽培することにした。夏に咲く花は

赤く美しく、日本とは全く違う料理方法があり、6 次産業化の手応えも感じられた。

伝統農法を科学で解明

オーガニック栽培に徹し、収穫した花豆を築地の豆問屋に納品。「好感触を得て、翌年も栽培して欲しいとリクエストを頂いた。農家の人は、畑にいい肥料、堆肥を知っていて、冬になる前に山に入り落ち葉を集めるなど家のそばで見つけ使っている」と水谷さんは、伝統農法に学ぶとともに、経験知だけでなく、微生物の働き、物質循環、遺伝の法則など、科学的な知識を高めるために信州大学大学院に 2018 年 4 月に入学。特に花豆栽培と関連が深いと考えられる根粒菌のメカニズムや土壌微生物のメタゲノム解析に取り組んでいる。

花豆栽培を開始して 3 年目(2018 年)は、異常気象に見舞われ、実をつける前に枯れてしまう

など、収穫は前年比を大幅に下回り、「問屋さんに迷惑をかけてしまった」と農業の難しさを痛感している。しかし、大学での研究から、これまでとは違った可能性が見えてきて、花豆をより魅力的な商品として販売できる希望も生まれている。

移住者の視点で戸隠の豊かさを伝える

移住し、農業を始めるにあたり、多くの人から、早く地域になじめるよう師匠につき指導してもらおうと薦められたそう。しかし、地域が輝くためには何が必要かを改めて考えた水谷さんは、地域に同化すると、何でも当たり前になってしまうのではないかと、あえて1年間は指導を請わなかった。だからこそこの地域で普通に食されていた高原花豆の可能性に気づいたのだという。



四季折々に美しい自然の絵画が見られる戸隠

客観的に地域を見ることで、地域の本当の良さに気づき、地域のポテンシャルを引き出すことができる。外からの視点を大切に、地元にあるものとミックスさせ、イノベーションをエッセンスに農業、地域づくりに取り組みたいと熱く語る。

昨年（2018年）9月、戸隠に来てもらえるきっかけづくりをしようと、花豆など地元の食材を使った料理を提供する cafe と民泊をオープンさせた。宣伝は、ホームページだけだが、二人を応援する人、訪れた人達の口コミのお陰で少しずつ来客が増えている。

料理は信州の伝統食を学んだ水谷さんの妻、江希さんが、マクロビオティック^{みずき}*の経験も活かし戸隠近隣で栽培された地の食材を使って創作

する。特に江希さんが栽培したエディブルフラワー（食べられる花）を使った料理は、彩りが鮮やかで女性に人気がある。

※自然と調和する「食」を含めたライフスタイル



水谷翔さん、江希さんご夫妻の民泊はあたたかく静かな山の暮らしが感じられる（エディブルフラワーのビニールハウス前で）

「花豆ベジタコライス」をいただくと、赤いナスタチュームは高原花豆の花を、スパイスのきいた香辛料は花豆の原産地を、そしてベジミートソースは何故か信州みそを彷彿した。

「農業は人が考えるよりも時に早く、時に遅く自然のリズムそのまま流れていく。その営みに添いながら、どれだけ手を加えて魅力的にできるかを考え、出会った人とのご縁を大切に、あたたかい人の営みが感じられる場所をつくり、訪れる人達と交流したい」と語る若い二人の姿に共感し、戸隠に移住を考える若者が現れる日も近いだろう。



取材協力・写真提供

農家民宿・農 cafe・ Bioフォームこのえ
長野県長野市戸隠富岡 327
TEL : 070-2794-0693
<https://togakushikokonoe.com/>

会員だより

「平成30年秋の叙勲」で、栄えある勲章を6名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。

瑞宝中綬章

南部 隆秋氏

(神奈川県川崎市在住)

元北陸地方建設局
道路計画課長



59 豪雪と北陸の雪対策の思い出

平成30年秋の叙勲に際し、はからずも瑞宝中綬章拝受の栄に浴しました。

これもひとえに、皆様方からの長年にわたるご指導、ご支援の賜であり、あらためて深く感謝申し上げます。

私の建設省での原点の一つは北陸地建での経験にあると思っております。昭和56年から金沢工事事務所の調査二課長を2年、局の道路管理課長を2年、道路計画課長を約1年務めさせていただきました。

特に、道路管理課長として、おそらく戦後最大の豪雪である59豪雪に直面し、多くの方々に支えていただいていたなんとか乗り越えることができたのが、一番の思い出です。

59年豪雪は、まさに異常な雪でした。年末から降り始めた雪はひたすら降り続き、2月の下旬になれば収まってくるだろうとの期待を裏切り、2月の後半から1月よりも激しさを増し3月に入ってもさらに激しさを増しました。全国的にも大寒波でした。湯沢維持の出張所長さんに一度現場を見てくださいといわれ、道路パトカーで三国トンネルへ向かう途中に最初の雪崩が発生、下に降りながら詰まっている車に向かい「前方で雪崩が発生し、通行できません。当分開通する見込みはありません。引き返してください。」とパトカーのスピーカーで呼びかけながら湯沢に戻りました。

当時、長岡国道工事事務所は除雪防雪工学の日本最先端の研究センターとして機能していました。(ある雑誌には日本の代表的な雪の研究所の一つとして、科学技術庁や大学の研究所と並んで紹介されていたほどです。)雪崩による荷重を研究し、設計方法を開発して日本で最初の本格的なスノーシェッドを設置しました。気象庁がまだ雪の観測や予報に積極的に取り組んでいない中で、科技庁と共同で自動積雪深計を開発し、各地に設置して積雪をリアルタイムで観測し、ほかの入手可能な気象情報とあわせて独自の降雪予測システムを開発していました。雪対策の一環として、直轄管理区間では初めて、ITVを17号の山越え区間に計画的に設置し、あわせて、路側放送を日本で初めて開始していました。(現在、路側放送で使われている1620kHzの周波数は、この時、長岡国道が許可を得たものを基本としています。その時は、対向二車線の道路の上下線で違う情報を出す必要があったので、520kHzくらいのところも取りました。中波放送の両端付近です。)リボンスクリューで雪を掻き、後ろの回転ブロワーでとばすツーステージ型のロータリー車は、海外の除雪機械が北陸の重く湿った大量の雪では十分使えなかったために、北陸地建の機械屋さんたちが主体となって開発したものです。すでに除雪トラック、グレーダー、ロータリー車を組み合わせた除雪体制はほぼ出来上がっており、例年雪崩が発生する危険性が高い箇所的大部分には、防雪柵、防雪シェルターが設置されていました。

私が赴任した時には、これら先輩たちのご努力のおかげで、17号の三国峠越えの区間は、当時の日本で最も充実した雪対策が行われていた区間だったのでした。

しかし、59 豪雪での 17 号山間部での雪崩は、降雪量の多さ（三俣で積雪深は 6 m 以上）と異常低温とがあいまって、極めて乾燥した雪によって発生し、それまでの雪崩とはまったく違うものでした。

17 号沿いではありませんが、吉村昭の「高熱隧道」に出てくる、飯場を対岸まで吹き飛ばしたという「泡雪崩」も発生しました。乾燥した粉雪と空気が混じりあって高速で流れ、すさまじい破壊力を持った雪崩です。川沿いを走った雪崩は、砂防ダムの片袖をスパッと切り落とし、かかっていた橋は跡形もなく吹き飛ばされ、直後にはどこに飛んで行ったのかわからない状態だったそうです。建設中だった関越トンネルでは、中間の換気立坑に雪崩が流れ込み、コンクリートライニングを破壊して、トンネルのど真ん中が雪とコンクリートの瓦礫でふさがれました。17 号の山間部では、本格的な泡雪崩の発生こそありませんでしたが、雪はサラサラサラと崩れ、傾斜のゆるやかなところでもあちこちで雪崩がおき、雪崩防止柵設置箇所でも、その間を流れて路面を覆いました。

湯沢の新潟側に 1 か所、雪崩のリスクがありながら、諸般の事情でシェッドが設置できていない大きな斜面がありました。1 日 1 m ほどの降雪の中、出張所長は危険と判断。この箇所を止めました。当然、山側も通行止めです。湯沢の町全体への交通が閉ざされました。新幹線は開通していました。週末でした。東京側からスキー客はどんどん送り込まれてきますが、その先に行く手段がないため、駅に人がたまり大変な状態になってしまいました。私は東京の国鉄に連絡し状況を説明し、新幹線に乗り込むお客様に、湯沢に行ってもほとんどのスキー場には行けないということをアナウンスしてくれるようお願いしました。最初は「何を言っているんだ」という感じでしたが、現地の様子が分かり、なんとか放送もしてくれたようです。

あまり間をおかず次の雪が来ました。その時

私は、底を突いた除雪費の増額をお願いしに、東京の本省に行っていました。出張所長さんから電話。「あそこで大規模雪崩が発生。大型車が 1 台吹き飛ばされてひっくり返りました！」前回その箇所を止めた時の社会的影響があまりに大きかったため、今度は、当該箇所を通行止めにする事ができなかったのです。「う、運転手さんは、運転手さんは無事ですか？」「大丈夫です。ほとんど怪我もなく脱出しました！」

安堵。もしも死亡事故になっていたら、管理瑕疵を問われ、出張所長さんが業務上過失致死で送検される可能性があり、前回、危険を予測して止めているだけに、裁判となった場合、雪崩発生予測は困難だったという主張がむずかしくなると思ったからです。

記憶をたよりに、59 豪雪の当時の思い出を思いつくままに綴らせていただきました。思い違いもあるかもしれませんが、その点をご容赦ください。

北陸地整の他の地整にはない特徴は、全地域が、世界でも珍しい豪雪地域にあり、そこに多くの都市があり人々が生活しているということです。このような状況は世界中でも、ほとんど例がないと思います。冬季の重く湿った大量の降雪に対応する道路管理に、諸先輩は本当に心血を注いで取り組んできました。時代は変わり、機械力も以前にもまして強化されてきました。気候もある程度は変化しているかもしれませんが、しかし、冬季の、日本海を流れる暖流と北西の季節風による豪雪をもたらす基本構造は変わることはありません。北陸地整の皆さんが、今までに積み上げてきた防雪除雪に関する研究開発、知識、経験の上に、気候や社会の変化、技術の進歩に対応し、新たな諸問題を克服して、これからも、世界最大の豪雪地帯での、世界最先端の道路管理に挑戦し続け、地域の生活をより良いものにしていただけることを信じております。

瑞宝小綬章

大林 厚次氏
(富山県高岡市在住)
元北陸地方整備局
道路部長



多くの人に支えられて

平成30年秋の叙勲で瑞宝章を受章することができました。これもひとえに多くの皆様から賜りましたご指導とご鞭撻のおかげと心から感謝申し上げます。

11月8日に国土交通大臣から勲記・勲章の伝達を受け、その後、皇居において天皇陛下に拝謁しお言葉をいただきました。秋の叙勲が今上天皇に拝謁できる最後の機会と思うと感慨深いものがありました。

私の役人生活は半世紀前の中部地建名四国道がスタート。新採当時は凶面のトレースや青焼き等が主で、特に青焼きのアンモニアの匂いが懐かしく思い出されます。

昭和48年に地建間配転で北陸地建に異動し、北陸地建(地整)管内、富山県、関東地整に勤務しました。勤務の大半が単身赴任生活で家族には大変苦勞をかけたなと思っておりますが、お陰様で多くの方々との出会いが今は懐かしい思い出になっております。

北陸地建でのスタートは富山工事工務第二課の配属になり、土木積算を担当することになりました。びっくりしたのは土木積算の電算化、さすが北陸地建は進んでいるなどの思いと同時に北陸スタイルに慣れるのに苦勞しました。その翌年から富山県庁に3年間出向しパーソナルトリップ調査(PT調査)を担当しました。PT調査は人の動きを調査し、総合的な交通計画策定等の基礎調査であることもあり、国、県、市からの出向者6名体制で県庁の一室で業務をしました。仕事はもとより多くの自治体職員の方との交流出来たことが財産となり、後々の仕事に大いに役立ったことが非常に良かったと思っております。

おります。

昭和53年から2年間は湯沢国道維持出張所。湯沢は雪深い山奥のイメージしかなく、気が進まぬまま4月に着任。未だ路側は堆く積まれた雪堤が湯沢の厳しさを物語っていました。雪解けを待って芽吹く新緑は格別でした。また秋の紅葉は厳冬を迎える前の癒やしでもありました。当時の湯沢は高度成長期の真っ只中、週末はスキー客が大挙して道路が大渋滞。全国に先駆けて路側放送、ITV等の運用、人工雪崩等多くの貴重な経験を今でも鮮明に記憶しております。

富山工事の調査課長、副所長時代は能越自動車道整備の最盛期。連日の対外協議や地元説明、工事の促進等、忙しい中を職員一丸となって取り組んだことが嬉しくもあり誇りでもありました。

道路部には通算10年余り在籍しましたが、最後に平成16年10月の新潟県中越地震に遭遇しました。最大震度7を記録し中山間地の到る処の斜面で大崩壊があり道路が寸断され、多くの孤立集落が発生しこの解消が最大の課題でした。また山古志村が壊滅的な被害を受け全村避難となり、村の復興には動脈である国道291号延長10kmの早期復旧が求められ、トンネル、橋梁等を含む難工事を直轄権限代行で行うことになりました。平成18年秋の完成を目標に不眠不休の努力により、平成18年9月3日快晴の青空の下、国土交通大臣を迎えて開通式が行われました。この国道の開通を足がかりに山古志村復興に期待する多くの村民の久しく無かった笑顔が特に印象的でした。

これまでを振り返ってみますと、多くの方々を支えられ多くの経験をさせていただき、厳しくも楽しい思い出多い充実した役人人生でした。改めて感謝申し上げます。今は富山に身を置き一層精進する所存であります。

ありがとうございました。

瑞宝双光章

菊地 純一 氏

(新潟県新潟市在住)

元北陸地方整備局
用地部 用地調整官



御礼と用地を担当して

平成 30 年秋の叙勲において「瑞宝双光章」の栄誉を受けました。

これもひとえに先輩・同僚・後輩や多くの皆様方のご指導ご支援の賜と深く感謝申し上げます。

昭和 42 年 4 月北陸地方建設局に採用され、会津若松市内の阿賀川工事事務所に配属となり、自宅からの通勤勤務となりました。

公務員生活は、本局 4 回（通算 15 年）及び 10 事務所に勤務し、平成 18 年 4 月退職するまで 35 年間用地補償業務に係わり、退職後、(社)日本補償コンサルタント協会に勤務し、平成 24 年 5 月退職することとなり、延べ 41 年間の用地補償関係の仕事が終わることとなりました。

採用された当時は、用地測量（平板測量）や建物調査・算定業務は勿論、登記書類の作成から申請まで、用地事務全般を自らが行うこととなり、その後の用地補償業務を長く担当するうえでの礎となりました。

忘れられない事柄は数多くありますが、北陸地方建設局として初めてとなる、次の用地対応が強く印象に残っています。

保倉川改修事業において、土地収用法による行政代執行により、土地の明け渡しを日の出から日没までの 1 日で実施しました。

所有者は、事業認定取消訴訟及び土地収用裁決取消訴訟を提訴し、土地の明渡しに応じてもらえないことから、関係機関の協力のもと、木造倉庫 2 棟、コンクリート工作物、立木の撤去を行い、事業用地の明け渡しを終了しました。

また、宇奈月ダム事業において、洪水吐放流及び排砂放流時の大流量により、低周波振動及

び飛沫が発生し、ホテル営業に影響が出ているとして損害補償請求がされ、更に処理期間が長引くと風評により客足が遠のくとして、迅速な対応を求められました。

ダム完成（管理）による低周波振動及び飛沫による家屋及び宿泊客に与える影響について、関係部局と調整のうえ、放流時における実態調査を繰り返し行い、建具取付の修復、外壁の清掃、修復期間の営業一時休止の補償を行いました。

用地補償業務を担当して、これまで多くの関係者と丁々発止の話し合いを重ねるなかで、知らずして人と人とのつきあいを学んできたのだと思います。

それぞれの職場において、地権者、関係者等多くの皆様方にお世話になり、職務を全うすることができました。

あらためまして、多くの皆様方に厚く御礼申し上げます。

瑞宝双光章

中野 晴喜氏

(石川県金沢市在住)

元北陸地方建設局
羽越工事事務所長



平成最後の「秋の叙勲」に感激

この度、叙勲の荣誉に浴しましたがこれもひとえに先輩、同僚の方々の温かいご指導ご厚情の賜と心から感謝申し上げます。

11月8日皇居にて天皇陛下拝謁の時、陛下が目の前をお通りになる際、受章の喜びと「平成最後の秋の叙勲」との思いも重なり、この上もない幸せを感じさせられました。

私自身、建設省入所以来今日まで半世紀以上の長きににわたり、これといった功績もなく過ごしてきましたが、この機会にふり返ってみることにしました。

昭和36年4月、中部地方建設局名古屋国道工事事務所に採用になり8等級2号俸、月給9,800円を、寮の食費と「お酒をたしなむ」費用に使果たし次の給料日が待ちどうしかった時代を懐かしく思います。昭和44年4月金沢工事事務所が北陸での仕事始めでした。

世の中は「日本列島改造論」で高度成長を遂げ、以降安定した「右肩上がり」の成長を長きにわたり続けてきました。

紛れもなく道路整備も追い風を受けた昭和50年代後半、金沢工事事務所道路計画係長の時、計画バイパス沿いの集落に行き新設道路の交差

形式や農地の用排水系統の機能補償等について協議する所謂「設計協議」に毎日のように昼夜を問わず課長・係長・係員の3人セットで出かけました。地元からは関係住民、役員(町内会長、生産組合長等)10～30人が集まり、「先代からの土地を売れない」・「バイパス反対」・「二度と来るな」・・・などと罵声を浴びせられ、門前払いされることもありました。「総論賛成・各論反対」の雰囲気を感じつつ道路建設に理解を得られることを信じて幾度となく設計に関する問答や現地立ち合いを重ねました。個人的には秋祭りに一升瓶を下げて役員懇親会に参加、また冬には町会長宅を訪問し、こたつで差し入れたみかんとお茶をすすりながら時を過ごしたことなど等・・・が双方の情報交換、コミュニケーションを通して合意に至り詳細設計・用地買収・工事実施へと進められたことが今も心に「成果」として残っております。

在職期間の殆どを道路の仕事をさせて頂きました。調査・計画、設計、工事、完成供用、維持管理まですべての部門を経験しましたが中でも印象深かった計画段階のおもいでを紹介しました。

現在は供用済みのくりからバイパス・小松バイパス・鹿島バイパスや加賀拡幅道路など「設計協議」当時を思い起こしながら快適に利用しております。

これからも、これらの大切な「インフラ」と「わが身」の長寿命化を祈りつつ余生を過ごしたいと思っております。

瑞宝小綬章

寺本 邦一氏

(新潟県新潟市在住)

元北陸地方建設局
建政部長



※官職は北陸地方建設局(整備局)在職時のものです。

瑞宝双光章

折敷 秀雄氏

(千葉県市川市在住)

元北陸地方建設局
横川ダム工事事務所長



国土整備と経済発展の手本

この度、叙勲の栄に浴することができ、身に余る光栄と恐縮しております。

これも、長きにわたり北陸の皆様から頂戴いたしました、ご指導、ご鞭撻の賜物であり深く感謝申し上げます。

私は、公務員として働く中で、国土整備と豊かな暮らしの実現に大きなウェートを占めている仕事に従事でき、感謝しながら過ごしていました。

特に、当時、「列島改造論」等の中心的地域に組み込まれ、目覚ましい躍進を続ける北陸と、そこに働いておられる皆様に一種の憧れを抱いていました。

そして、本省治水課の補佐に就任した時、全国の直轄河川の災害や技術開発などと併せ、北陸・中部地区の直接の事業担当となりました。

当時、北陸には、全国に先駆けて消流雪用水

の事業、多自然型川づくり、伝統的工法関連事業など多様な事業が組み込まれていました。また、県の事業も多く、ヒアリングの時間も他地方の倍くらい掛かっていました。

しかし、申請されて来る各事業は、国、県、市町村の固い連携の下、事業実施上の課題は、きちんと整理・処理されていて、クレームの付けようもなく、感心しながら承認していました。

こうして3年にわたり北陸の河川事業に携わらせていただいた後、平成7年、急に、横川ダムへの勤務を命じられました。勤務地は山形県小国町でした。

青天の霹靂、北陸勤務もダムも初めて、小国町は、とても遠い地でした。

しかし、北陸の皆さん、小国の皆さんに温かく支えていただき、おいしい山菜・お酒を頂きながら山に登り、スキー教室にも通い、難しい仕事もありましたが、初めての雪国・山国の生活を満喫させていただきました。

今も、支えていただきました皆様と、北陸地方、新潟、小国などの素晴らしい風土・景色に感謝と憧れをもって暮らしております。ここに紙面をお借りし、お世話になりました皆様に厚く厚く御礼申し上げます。

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業 募集中 【募集期間】平成30年12月1日(土)～平成31年2月1日(金)

詳細は、協会ホームページ (<http://www2.hokurikutei.or.jp/>) の
トップページ「お知らせ」2018年11月14日をご覧ください。
皆様のご応募をお待ちしています。

助成事業名	助成対象	助成金	助成 予定数	審査
地域づくり研究事業	大学・企業・法人 任意団体・個人 またはこれらの団体	20～50万円 完成払 (概算払1/2まで)	12	書類審査
技術開発支援事業			3	書類審査
技術開発共同研究	大学もしくは高専を含む 2つ以上の機関	200～300万円 (概算払1/2まで)	2	書類審査 プレゼンテーション

※助成数は増減することがあります。

※助成金は完成時の実績に基づいてお支払します。結果、申請額より少なくなる場合もあります。

伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
平成 30 年度 「防災とボランティア 週間」防災講演会	1月17日(木) 13:30～17:15	新潟東映ホテル 1F「白鳥」 定員 200 名	北陸地域づくり協会の寄附で設けられた金沢大学「都市・河川防災講座」における研究報告など 「広域・激化する豪雨・洪水災害の克服を目指して」 講師:辻本 哲郎 氏 金沢大学 大学院自然科学研究科 特任教授 ほか金沢大学、北陸地方整備局から 5 題	北陸地方防災エキスパート事務局 (北陸地域づくり協会 企画事業部) TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205 締切:1月10日(木)
第 19 回 社会資本整備 セミナー	1月22日(火) 13:30～16:00	ポルファートとやま 4F「琥珀」 定員 150 名	■講演① 「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師:北陸地方整備局 担当官	社会資本整備セミナー事務局(北陸地域づくり協会 企画事業部) TEL:025-381-1882 FAX:025-383-1205 締切:1月10日(木)
	1月23日(水) 13:30～16:00	石川県勤労者福祉文化会館 2F「全ホール」 定員 140 名	■講演② 「BIM/CIM 入門 —ここまで来ている 3次元—」 講師:藤澤 泰雄 氏 (一社)Civil ユーザ会 代表理事	
	1月24日(木) 13:00～15:30	長野パスターミナル会館 4F「芙蓉・寿」 定員 80 名		
	1月29日(火) 13:30～16:00	新潟県自治会館 1F「講堂」 定員 250 名		
河川防災 フォーラム 2019	1月30日(水) 13:00～17:00	新潟市万代市民会館 多目的ホール 参加費 500 円	「平成 30 年 7 月豪雨」を踏まえて、これからの水防災を考える 新潟地方気象台、北陸地方整備局、新潟県から 4 題	NPO法人水環境技術研究会(株)キタック近藤 TEL:025-281-1115 FAX:025-281-0005 締切:1月21日(月)
第 15 回 南砺利賀そば祭り	2月8日(金) ～2月10日(日)	利賀国際キャンプ場 周辺(南砺市利賀村 上百瀬)	利賀特産そば粉を使用した手打ちそばや岩魚の塩焼き、五平餅などを味わい、民謡、雪夜の花火ショーなどが楽しめる	南砺利賀そば祭り実行委員会(南砺市利賀行政センター内) TEL:0763-68-2111
「北陸地域の活性化」 に関する研究助成 事業報告会	3月7日(木) 13:00～17:45	新潟グランドホテル 5F「常盤の間」 定員 100 名	第 23 回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業、18 課題の成果報告 第 24 回研究助成事業審査結果発表	北陸地域づくり協会 企画事業部 TEL:025-381-1160 FAX:025-383-1205 締切:2月22日(金)

編集後記

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。
藤岡先生の随想に、『夢ゼミ』をとおして、進学で地域を出ても、「仕事を創りに帰りたい」という高校生が増えている。『ブーメラン人材』が地域を変革し活性化していく」とある。今号にも「佐渡通い」を提唱し、「学校蔵プロジェクト」に取り組んでいる尾畑さん、また郷土史を学び、将来は生まれ育った地で農業をやりたいと思うようになった小学生がいる。戸隠にトーンし農業、民泊に取り組んでいる水谷夫妻の暮らしぶりは、豊かさが感じられた。北陸の魅力は、人であり、その生き方にある。受け継がれてきた文化を磨いている人が住む地域は輝いて見える。
(事務局)

地域づくり in ほくりく 第 18 号

発行 平成 31 年 1 月 1 日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目 3 番 4 号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>